

陳舜臣さんを語る会通信

NO.71 May. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年5月20日

http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

最後期の推理短編集『三本松伝説』/「陳舜臣さんを語る会通信」一覧

本号では先ず、推理短編集『三本松伝説』を取り上げます。初出は1960年代の作品もありますが、短編集の刊行は1991年(徳間書店)で、陳舜臣さんの短編小説集の刊行としては、このあと数冊しかありません。最後期のものです。陳舜臣さんの短編執筆は、作家デビューして、比較的初期に多い。1970年代後半から80年代になると中国歴史ものがグッと増えます。思うに、最初は出版社主導での執筆だった(下枠傍線①)のが、この時期になると、書きたいものを書くというようになってきたのではないのでしょうか。

本号、3、4頁では、「陳舜臣さんを語る会通信」のバックナンバー一覧を掲載しています。一昨年(2020)の3月に「通信」の発行を始め、はや2年が過ぎ、第71号を発行するところまでできました。ウェブサイトにアップしています。サイトへの入り方は3頁をご覧ください。(編集委員 橘雄三)

単行本「あとがき」より転載
小見出し及び傍線は
編集委員の加筆

◆『白い檻』以外、語り手は「私」

本書に収めた作品は、『白い檻』を除くと、すべて語り手が「私」になっている。意図して集めたのではなく、私の作品にはそれが多いのである。とくにかなりの執筆量を強いられていた時期①は、しぜん自分に最も書きやすいスタイルをえらぶことになったようだ。

◆第一部 小説ふうミステリー

そのなかでも、第一部の三作は、その「私」が作品にきわめて密着している。読み返してみると、私自身の呼吸がきこえてくるような気がした。それも、はずんだ若い呼吸である。無意識のうちに、そんな自分の若さをふりかえってみたくなる時期にあたっていたのであるのか。事件そのものはフィクションだが、舞台となる場所や時代は私の熟知しているもので、私小説ふうミステリーと評されたことがある。

◆第二部 海外舞台の歴史もの

第二部は語り手こそ「私」だが、ストーリーとはかなりの距離をおいている。テーマによって分類す

れば、歴史ものといえるかもしれない。語り手はなれているのはどうぜんであろう。

舞台は三作とも海外にとついている。弓月城も福建海岸も台湾祖師廟②も、私とその地を踏んだ場所である。もつともそれは、このような小説をかくために取材しようとしての旅ではなかった。旅から帰って、書いてみようという気になった作品である。これは私がかねがね「理想の取材旅行」と呼んでいたものにほかならない。書かねばならないというプレッシャーなしに、たのしい旅をしてそのあと醸し出された作品といえるだろう。

収録にあたって、久しぶりに読み返してみたが、イリの草原や南海の岸、そして故郷の山なみがまたぶたのうらによみがえり、なつかしさにため息をもらしたことだった。

なお昨年十二月、私は四十一年ぶりに台湾に帰省③し、祖師廟を訪ねてみた。廟そのものは昔のままだったが、周辺はすっかり変わっていた。かつては一面の田畑であったが、いまは住宅が建ちならんでいる。この変貌に接して、時代を記録することも、小説家の一つの義務ではあるまいかと思ったりした。

◆第三部 香港舞台のミステリー

第三部の二作は、香港を舞台にしたミステリーである。旅行がかったんになった現在、海外のもつエキゾチシズムは薄らいできたようだ。だが、ポードーレス時代の波のうねりを前に、私たちはもつと異郷に親しむ必要があるだろう。この二作も、工夫をすれば、舞台を日本にしても差支えないような気もする。だが、工夫して香港を舞台に設定したのは、それなりの意味があったとおもう。

一九九一年六月 陳舜臣

補足② ■『三本松伝説』収録の

「祖師廟にて」は、短編ではありますが、台湾を舞台にした数少ない小説の一編です。

補足③ ■一九九〇年十月、日本国籍取得。十二月、四十一年ぶりに台湾へ。李登輝総統訪問。



徳間書店『三本松伝説』表紙
写真は一九六一年、著者が撮影した神戸北野町三本松付近

『三本松伝説』 内容紹介ほか

部	各編題及び初出	各編内容
第一部	港育ち 『別冊文春』 1975年132号	昭和8年から終戦の年まで私は大通りを隔てて港に面した家(「三色の家」とか「フランス国旗の家」とか呼ばれていた)に住んでいた。当時、外国人および植民地出身者のところへは、特高警察が定期的に訪問することになっていて、私の家もそれに該当した。そんなこともあって、私は小学生のころから、「日本人でないことを、片時も忘れてはならない」「生まれながらにして疑われる人間なのだ」ということを知っていた。そんな時代の回想談、親しくなった舂の子のこと、少年店員が話してくれた「死体が倉庫の壁に塗り込められている」という話など…
	三本松伝説 『別冊文春』 1977年142号	私は、戦中、昭和19年の秋、それまで住んでいた海岸通りの家から北野町に引っ越した。近くに不動尊の祠があった。むかしここに三本の大きな松があったという。近所の異人館のお手伝いさんのSさんは、話を自説に都合のいいように三本松不動尊の祟りに結びつける。精神に異常をきたしていたフランス人M姉妹のこと、アメリカ人ハリマンさんの神隠しなど
	惚れアンコ 『週刊小説』 1975年 1月10、17日号	私が中学生で、受験準備をしていた昭和十四、五年、海岸通のむこう側の埋め立てがはじまった頃のこと。アンコとは港湾労務者のことで、題の「惚れアンコ」とは、惚れっぽいアンコのこと。その惚れ方が異常なので、これまで二回、女に惚れ、二度とも不首尾に終わっていた。今回、こんな男に目をつけられたのは、バラック喫茶店の手伝いをしているお銀さんという娘であった
第二部	弓月城記 『野性時代』 1982年1月号	私はウルムチ市内に住む柳訓(りゅうくん)という老人の家を訪ねた。目的は、1920年代から30年代にかけてのこの地方の話を知りたいためであった。柳訓さんは、五十年あまり新疆に住んでおり、アンダーソン博士の考古学調査の案内役をつとめたり、西北科学考察団に雇われたりしたことがある。そんな柳訓さんには、「唐代の弓月城の遺跡を掘る」という夢があった
	老十三物語 『小説新潮』 1977年9月号	講演旅行で行った対馬の旅館で、福建・台湾地方の特産物、豚肉デンプの一種、バーフーが美味しいという話になり、「肉腐と書いてバーフーや」という開高健さんと、「そうじゃない」という私と議論になった。旅行から帰って、私はこのことを老華僑のTさんに訊いてみた。これに関しTさんは道光年間初期の海賊の手下、老十三の話を始める
	祖師廟にて 『推理界』 1967年10月号	もう二十年近くも前、私が台湾に帰省中の話である。各地の寺廟を渡り歩き、一宿二飯を乞うのが、そのころの私の趣味であった。僧侶や道士を相手に、色んな話を聞き出し、メモするのが楽しみであった。その日私は、俗称「鼻欠け祖師」を祀る祖師廟に宿泊した。天下の大動乱があると、直前に、その祖師像の鼻がぼろりと欠け、住民に大異変を警告するという
第三部	白い檻 『現代』 1972年新年号	小竹(こたけ)哲吾は香港の空港で、かつての教え子、穂高から声をかけられる。小竹は職業軍人であったが、戦後、大学で植物学を専攻、学究の道を進み大学教授となり、「におい草博士」と呼ばれていた。小竹は穂高から、面識のある香料研究の大家ハンター博士が香港にいると聞き、翌日、博士を訪ねる。物語は、この地に将校として赴任していた昭和19年、一人の女性とその弟に出会う回想を挟み進展する
	欲望の交差点 『問題小説』 1971年2月号	舞台は香港。主人公・語り手は「私」大久保伸次、30歳そこそこ、小さな貿易会社の社長。対香港の取引が多く、香港出張も多い。特に、頼碧雲という女性と懇ろになってからは香港出張という心が弾んだ。その日、滞在中の香港のホテルに、親しい友人、香港警察の宋有盛から電話がかかってくる。事故死の死体が「きみが探している男かもしれない」という

■三本松不動尊の今

「三本松伝説」から引用します。

北野町の一丁目と二丁目を分ける坂の南半分を不動坂という。二丁目側の角のところに不動尊の祠があるからだ。

むかしここに三本の大きな松があったらしく、俗称「三本松」である。



画像はhirukarasanpo.blog.fc2.com より

「陳舜臣さんを語る会通信」バックナンバー一覽表(1)



二〇一九年の秋、かかわっている神戸華僑歴史博物館の常設展に陳舜臣コーナーができました。「これから、陳舜臣関係の情報発信に力を入れよう」との声に背を押され、個人的に、「陳舜臣さんを語る会通信」の発行を始めた。そんな中、神戸華僑歴史博物館では、二〇二一年一月から二月にかけて、「陳舜臣没後六年桃源忌特別展」が開催されました。これも励みに、現在、70号まで発行しています。

私(橋)のホームページ「中国の友人たち」に、「語る会通信」のコーナーを設けています。グーグルでもヤフーでも、**中国の友人たち**をキーワードにクリックすると候補が表示されますが、上位に出できます。これをクリックすると左のような画面が表示されます。その左端、陳舜臣さんの画像をクリックすると一覽表画面です。一度、覗いてみて下さい。

■「陳舜臣さんを語る会通信」の発行

号	発行年月日	主要記事
1	2020.3.1	「陳舜臣さん 台湾・大陸 旅の記録」 「陳舜臣さんを悼む」玉岡かおる
2	2020.3.20	『中国傑物伝』 『タイワニーズ 故郷喪失者の物語』
3	2020.4.15	『怒りの菩薩』 陳舜臣さんの引っ越し歴
4	2020.5.1	そうは問屋が卸さなかった『太平天国』
5	2020.5.1	舞子浜の呉邸が舞台、『囚人の斧』 妹、妙玲さんのこと
6	2020.5.1	陳さんの強い思い入れ『耶律楚材』 太平天国取材旅行-桂平、金田村へ-
7	2020.5.1	沖縄への優しい眼差し『琉球の風』(1993年NHK大河ドラマ原作)
8	2020.5.1	『青山一髪』(文庫本出版に際し『孫文』と改題)
9	2020.5.15	『龍鳳のくに』 『巷談 中国近代英傑列伝』 陳舜臣さん思い入れの二人、黄遵憲と劉鉄雲
10	2020.5.15	司馬遼太郎『街道をゆく25(閩のみち)』 『中国歴史の旅』「井岡山」
11	2020.6.1	陳舜臣、中国歴史小説の本線をなす一作『山河在り』
12	2020.7.1	陳舜臣文学の白眉『桃源郷』
13	2020.7.15	「できれば学問の周辺にいたい」と願った10年 業界誌に見える「泰安公司」と陳さん
14	2020.7.20	「泰安公司」の位置 海岸村見取図 登記簿 武夷登山会 「九雷溪」と瞿秋白
15	2020.8.15	『残糸の曲』と『桃花流水』は一对、先ず前者から
16	2020.8.20	盧溝橋事件からの一年半を回想に託して書いた『桃花流水』
17	2020.9.1	陳舜臣作品に登場する李登輝さん 蘇曼殊を描いた『燕の影』 陳舜臣ご夫妻の二人三脚「わが心の自叙伝」
18	2020.9.15	『江は流れず-小説日清戦争-』 陳舜臣さん、文革期の大寨を訪れる
19	2020.10.1	直木賞受賞作『青玉獅子香炉』 陳舜臣さん、老いを語る
20	2020.10.10	中国歴史小説、いきなりの三千枚『阿片戦争』 『実録アヘン戦争』
21	2020.10.15	法悦を感じながら書いた『曼陀羅の人 空海求法伝』
22	2020.10.20	現地踏査と文献を駆使した労作『茶の話 茶事遍路』
23	2020.11.1	中国通史『中国の歴史』及び『中国の歴史 近・現代篇』 陳さんは文化大革命をどう見ていたか
24	2020.11.15	『世界の都市の物語 16 香港』
25	2020.12.20	陳さん思い入れの『世界の都市の物語 4 イスタンブール』
26	2021.2.1	頭の中の諸葛孔明像を敢えて無視した『諸葛孔明』
27	2021.1.15	『曹操 魏の曹一族』
28	2021.3.1	神戸華僑歴史博物館「陳舜臣没後6年桃源忌特別展」1
29	2021.3.1	神戸華僑歴史博物館「陳舜臣没後6年桃源忌特別展」2
30	2021.3.1	神戸華僑歴史博物館「陳舜臣没後6年桃源忌特別展」3

「陳舜臣さんを語る会通信」バックナンバー一覧表(2)

号	発行年月日	主要記事
31	2021.2.10	陳舜臣さん最後の小説『曹操残夢 魏の曹一族』
32	2021.3.10	半身麻痺と闘い完走、『チンギス・ハーンの一族』
33	2021.3.20	【絶筆】『天空の詩人 李白』
34	2021.4.10	作家になる前から構想、『紙の道(ペーパーロード)』
35	2021.4.20	『小説マルコ・ポーロ 中国冒険譚』
36	2021.5.1	玄奘の旅と『西遊記』にご自身の旅を交えた『新西遊記』
37	2021.5.10	中国並びに中国史理解の必読書『儒教三千年』
38	2021.5.20	三十年來の宿題、『天球は翔ける』
39	2021.6.1	陳さん、インドは我が青春の一部 『インド三国志』
40	2021.6.15	小説の醍醐味を満喫させてくれる『珊瑚の枕』
41	2021.7.10	昭和45年度日本推理作家協会賞受賞作『玉嶺よふたび』『孔雀の道』 士は己を知る者のために死に、作家は己を認める者のために書く 『宝石』(1963年9月号)掲載の陳語録「犬より猫が好き」「歌舞伎は嫌い」
42	2021.7.20	16世紀半、北虜南倭に揺れる明国と毛利ら戦国武将が争う日本が舞台『戦国海商伝』
43	2021.8.1	作家の出発点となった、江戸川乱歩賞受賞作『枯草の根』
44	2021.8.15	「小説家である以上、恋愛も・・・」と奮起して書いた『相思青花』
45	2021.9.1	地方紙20数社が連載した『夢ざめの坂』
46	2021.9.10	明清交替期の中国を舞台に北の呉三桂、南の鄭芝竜を中心に描く『風よ雲よ』
47	2021.9.20	『風よ雲よ』と『旋風に告げよ』は二部作 本号では後者を取り上げました 新聞連載小説一覧
48	2021.9.20	陳舜臣作詞、上海日本人学校校歌 『怒りの菩薩』読者からの詰問状 陳舜臣さん、毛沢東像があったころの移情閣を訪れる ほか
49	2021.10.10	『中国任侠伝』『中国詩人伝』・・・、『中国〇〇伝』(人物評伝)集合!
50	2021.10.20	1975年、家族4人の『敦煌の旅』(第3回大佛次郎賞受賞)
51	2021.11.10	『枯草の根』『三色の家』『虹の舞台』・・・"陶展文もの"集合!
52	2021.11.20	"陶展文もの"集合!(続)『割れる』、「縄」三部作、『崩れた直線』『軌跡は消えず』ほか
53	2021.12.1	日本人青年賀望東、唐の都で事件を解く! 『長安日記』 賀望東は登場しないが、唐の都を舞台にした最初の作品「方壺園」
54	2021.12.1	1966年下期、第56回直木賞候補にノミネートされた『炎に絵を』 陳舜臣さん、直木賞受賞祝賀会の写真(於: 灯籠茶屋)見つかる!
55	2021.12.10	中国の女のお化けの物語『聊斎志異考』 太宰治の「清貧譚」
56	2021.12.20	『ものがたり史記』『ものがたり唐代伝奇』『ものがたり水滸伝』
57	2022.1.1	講談社『陳舜臣全集20』収録、『失われた背景』『月をのせた海』
58	2022.1.15	陳舜臣さんの「作品一覧」 著作数、小説は90数冊
59	2022.2.1	中国古典紀行『英雄ありて』 NHK『空旅中国 李白長江をゆく』
60	2022.2.15	エッセイ集『録外録』と小説集『わが集外集』
61	2022.3.15	『阿片戦争』に並ぶ中国歴史小説の大作『秘本三国志』
62	2022.3.20	陳舜臣小説の最長編でミリオンセラー『小説十八史略』
63	2022.4.1	連作短編集3冊 『柵の館』『青春の烙印』『漢古印縁起』
64	2022.4.1	連作短編集もう一冊 『神戸異人館事件帖』 「桃源忌」新聞記事
65	2022.4.20	魯迅及び陳舜臣 秋瑾、瞿秋白をとおして
66	2022.4.20	1990年刊行の推理短編集2冊、『異人館周辺』『杭州菊花園』
67	2022.5.1	歴史小説の短編集2冊、『胡蝶の陣』『五台山清涼寺』
68	2022.5.10	1960年代刊行の推理小説を2作 『弓の部屋』、『他人の鍵』
69	2022.5.15	『神戸というまち』『神戸ものがたり』『神戸わがふるさと』
70	2022.5.20	日本史を題材にした『山河太平記』『人物・日本史記』『楠木正成 湊川の戦い』